

第 10 回市立中学校のあり方検討委員会 会議録（概要）

- 1 日時 令和 5 年 7 月 24 日（月）午後 7 時 00 分～午後 8 時 40 分
- 2 会場 千手中央コミュニティセンター 千年の森ホール
- 3 出席者
 - (1) 委員 21 名
 - (2) 事務局 6 名 渡辺教育長、鈴木教育文化部長、玉村教育総務課長、細木学校教育課長、藤田指導管理主事、山岸教育総務課長補佐

4 会議概要

- (1) 開会あいさつ（雲尾委員長）
- (2) 議事

以下のとおり審議が行われた。

発言者	発言概要
① 検討委員会の会議日程及び内容等について（令和 5 年 7 月 24 日現在）	
事務局	（資料に基づき説明） （質問等なし）
② 学力向上の取組について	
事務局	（資料に基づき説明）
委員	具体的に何をやっているのか、うまくいっている例があれば、ぜひそれを紹介してほしい。
事務局	ウェブ Q U を通して子供たちの学級の実態を捉え、各学級で具体的に授業としてはどのような手だてを組んだらいいのかということを考えていく。例えばこの子はなかなか自分が認められないという承認特定の低い子であれば、学習の中や生活の中でその子が認められる場面をつくるというような取組を行っている。学校現場での様子というあたりも具体的にこの学級ではこんなことしているというのがあれば教えていただきたい。
委員	小学校では、子供たちが一人一人アンケートに答え、回答がすぐに開示されるので、その結果に基づいて、担任が対応を考えていく。アンケートは 6 月と 11 月に実施するので、次の 11 月には改善されるよう、働きかけをしていくという形になる。昨年もそういった形で非承認群から褒められていくことによって、承認群のほうに入っていく、インクルーシブラインに入っていくということがあった。そんなふうはそのウェブ Q U の結果に基づき、子供たちが安定して学力を発揮できるよう進めている。
委員	中学校ではウェブ Q U を活用し、学級の状況をアセスメントしながら、それに対応した手だてに日々取り組んでいるところである。冒頭 N R T の平均偏差値の話があったが、この偏差値を上げようとして、例えば毎日のよう

にテストをして、毎日のように宿題を出して、毎日のようにチェックをして
ということをやると、一見点数は上がるということは教員としては経験的
には分かっている。しかし、その分そこに乗り切れない子供たちがいて、学
校へ来れなくなるとか、あるいは教室にいれなくなるとか、そういった現象
も副反応として起こってくる。つまり、その学級が非常に居心地のいい状況
が保たれた中で、さあ、みんなで勉強頑張ろうというふうに持っていかないと、
今学校へ来ている子たちの学力は上がるが、学校から漏れていってしまう
子供たちが増えてしまうことがある。そして、学校になじめなくなってしまう
たり、あるいは集団になじめなくなってしまうというような子供
たちの中には、特別な支援を必要とするような子供たちも多く含まれてい
る。そこで、十日町市の学校教育の目当てである、学力の向上、不登校・い
じめの減少、特別支援教育の充実、この3つが絡まった形で何かしらの影響
関係を持ち続けるということがある。この3つを全てクリアしていくため
の一つの土俵になる部分として、居心地のよい学級づくり、つまり子供たち
が毎日席を置く教室の中がどの子にとっても居心地のいい状況があるんだ
ということを目指していかないと、学力だけが向上するとか、不登校、い
じめだけが減少するとか、特別支援教育だけが充実していくとか、そういっ
たことは現実問題としてはなかなか実現しないと思っている。

事務局 6月と11月の年2回アンケートを実施しているわけだが、その実施の中
でやはり子供たちの学級の状態が親和型だと、ウェブテストの結果が毎回
上昇していく。ウェブQUの結果が崩壊型のクラスだと、がたがたになって
いくというような傾向も学級単位に見てとれる。子供たちに居心地のよい
安定した学級として、勉強の達成度を高めながら、いじめの減少にどうつな
げるか考えながら実施している。

事務局 このウェブQUを使った組み方というのは、その学級ごとに少しずつ違
う。その子供たちというか、その学級に沿った取り組み方をしていくように
している。そのためにも、大学の先生にアドバイザーをお願いして、具体的
な指導の仕方や試験の仕方、声掛けの仕方というのを学んでいる。例えば中
学校は、教科担任制で各教科の先生が専門なので、授業づくりに数学の先生
が国語の先生に何か物申すというのは難しいところがある。だが、ウェブQ
Uを通して、この子供たちにこんな手だてを具体的にしようといったときに、
より大勢の教科を超えた中で、子供たちへの関わり方などを共通理解して、
どんな教科でも見込めるような形もできてきている。若手も含めていろん
な先生方が手だてを共通理解として指導していくので、より具体的な指導
が実は現場では行われているというのがこの取組を通したよさだと思っ
ている。そして、先生方がこのウェブQUの結果を通してながら、子供たちのこ
とを共通に理解していく、そして同じベースで授業を見ていくというよう

なこともできてきており、その効果が出ていると実感している。

委員長

QUというのはハイパーQUとか、ウェブQUのよさはいろいろある。子供をしっかりと見ていけば分かることかもしれないが、学校の状況だとなかなか見れないということや、平均的に全ての子を見ることができない、それこそ先生の目がなかなか行き届かない、また比較的問題がない子にどう関わるかというところがよく見えなかった。年2回アンケート結果を見る中で、しっかりと見ていけるようになってきているというのが実際事実だと思う。そういう形では、学級づくり、学級経営等にもそのまま活用しているという、それは幾らお金払ってもできないことでもあるので、市教委の方でバックアップして進めているということであると思う。

事務局

なぜウェブQUを導入したかというところ、もともと早稲田大学の河村先生という方がこのシステムを開発をされているところだが、県内では伊佐先生という方が魚沼市のほうで初めて導入されて、普及に努めていらっしゃる。要は子供たちの心理アンケートで、この子はこういう感じだということをプロットされていく。そうすると、クラスごとに、どの辺にどういう子供がいるかなというのは一目で分かるようになる。

小中一貫教育の研修のときに取り上げた那須塩原市の取組では、それを入れる前と入れた後の学校の状況、不登校の状況と学力の状況というのが一目で違っていった。いろんな実践の中でこれがいいということが分かったので、令和4年度から実施学級を広げた。結果として子供たちはいろんなパターンに分類されたが、そのパターンごとに取組を変えることで、少しずつ変わっていき、いいほうに変わった。そうしたときに学力はどうなったかというところ、やはりそれにつられて学力は上がった結果が見えてきた。

そして、コロナの全盛期でしたので、全国的に物すごい不登校が増えたが、当市の中学校ではそれほど増えていない。小学校は若干増えたが、全国から見るとそれほどではなかった。

先生方はなかなか大変だと心配したが、そこをフォローするのが先ほど言った伊佐先生を中心とした専門家の先生方、その方々が個別に指導に入り、学校全体でそれを共有している。つまり学校で共有ということが1つ大きなポイントで、学級で担任の先生だけが分かっているだけだとそこだけで終わってしまうが、これを全体で共有する。それを出すことで、他と違いがあると気がつくし、ほかの先生もフォローができやすくなる。先生方の交流や、連携が深まったというのは、現場から聞いている。特に当市は、教員確保困難地域で、ほかの地域と比べて若い先生が多い。若い先生にとってもベテラン先生の運営される学級問題の解決方法を学びながらそれを生かせるというメリットもあって、その辺りが効果は大きいと思っている。それを続けることで学級運営、そして学力、不登校だという面に直接結びつくか分

からないが、効果が出てくると考えているので、少し中期、長期的な視点で見していきたいと思う。

委員 ここに学習時間、家庭での学習時間、各小学・中学校とあるが、この学習時間と子供たちの成績というか、学力はどうなっているのか。例えば2時間以上の勉強をして、あんまり成績が良くないと問題だと思うし、私は時間だけじゃなくて、そのほかに具体的に何をしているか、あるいは1時間でやっていることを40分でできたとなれば、すごくいいことではないかと思う。時間だけを評価の対象とせずに、その子の意欲をもっと引き立てるような方法も必要なのではないか。

事務局 時間と質というのは、考えていかなければならないところであるが、総体的に相関関係にある。ただ、学校の現場では、その家庭での学習の中身・質は検討されています。自分で決めて、自分のやりたいことを伸ばすとか、家庭でどんな学習をして過ごすか計画を立ててから帰宅する。学校ではそれぞれ質の部分を考え、時間だけじゃないというところで取組を進めている。学校現場のお話を聞きたいがいかがか。

委員 小学校の例だが、昨年から今年にかけて、高学年の家庭学習での算数の学習方法を変えた。今までは授業でやったものを復習するというのが経験上常であったが、それをあらかじめ予習をするという仕方に変えた。そして、授業ではその予習した内容について、なぜそのような計算方法をするのかということを考えさせる。そして、授業の中で考え方が分かったところで、さらに練習問題等をやるという授業の流れに変えた。そうしたところ、子供たちは予習を算数の担任がつくった予習動画をタブレットで見て、その動画を見て予習してきたことを授業で確認して考え方を確認、そして練習問題で確認という流れにした結果、とても学習が楽しくなったとってやっている。

実は、それができるようになった最大の理由は、当小学校には算数センターということで、中学校の算数の免許を持っている方を1人加配で県からつけていただいている。担任の空き時間をつくるという職員の働き方改革の意味も込めて、この加配をつけていただいたが、算数センターが授業をするときに、担任が補助として分からない子への助言をするようになって、担それによって算数の力はかなり高まるのではないかと考えている。

委員 中学校の場合は、学力の向上としてNRTや、全国学力・学習状況調査の方向を目指してというよりは、特に例えば今中学校3年生ですと、高校入試をにらんだ学力向上策というか、筆答検査に耐え得る学力を何とか保障してあげようというような動きである。1年生、2年生についても、遠からずそういう年代に差しかかっていくので、その辺に真っ向勝負を挑めるだけの学力をつけてあげたいというのがある。

一方で、家庭学習という面からは、これについては各教科の授業ごとに宿題が出されることもあるし、それに加えて学年部として、全ての教科を満遍なく取り組めるような形での学習計画も生徒自身に立てさせて学習を進めようと呼びかけてはいますが、今部活の最盛期であり、体力も尽き果ててへとへとになって帰宅するような生徒もいると思っている。なので、1日何時間という言い方はあまり強くせずに、例えば1週間で7時間とか1週間で14時間とかというふうにすると、今日はもうへとへとで勉強できませんでしたという子も、その分土曜日朝から頑張るといような調整も可能になるような形の工夫をしている。

先ほど指摘があるように、時間だけ増えれば学力が向上するかというと、そうでもないということは、我々も経験的にも承知している。なので、課題の出し方を工夫したりしながら、その子の頑張るべきところを教師の目で見、アドバイスができるような準備を進めているが、全ての生徒に有効な家庭学習のさせ方というのは、なかなか見つからないというのが正直なところである。

委員 この間テレビで夏休みの宿題はなしというのをやっていた。十日町市はどうか。

委員 市全体は分からないが、当中学校は夏休みの宿題出す。ただ個別には配慮が必要な生徒もいるので、それは個別の面談のときに、全体としては100の宿題が出ているところ、あなたは自分のペースで60まで頑張るといような配慮をするなど、個別に対応しているところである。

委員 当小学校では、どの学年も夏休みのワークブックをそろえたものを買っているが、それは薄めのものにしておいて、そのほかにも自由に申し込むことができるワークブックを紹介している。全体として決まった量を減らしておくことによって、自由課題も必ず1つ何か挑戦しようということにしており、そのほかにも絵画コンクールに参加するとか、あと郡市の発明工夫模型展に出品するなど、そういったものを自由に自分で決めて取り組めるようにしている。

委員 1日当たりどれぐらい勉強しますかというグラフでちょっと気になったが、注意書きで「塾や家庭教師を含む」とある。自分が東京に住んでいたときは、小学校に入ったら塾に行く子がほとんどであった。2時間以上勉強する割合が国に比べて市はかなり低く、こうやってグラフを見せられると、市はこんなに差があるという、親としては不安がある。塾に行っていれば必ず2時間授業があれば椅子に座っているし、授業を真面目に受けている子もいればそうではない子もいるので、意味があるのかどうか。親としては、塾以外で自ら椅子に座って勉強している時間が実際どれぐらい全国的にあるのかというほうが比較できると思うが、それでもあえて塾や家庭教師を含

む勉強時間で比較しているが、何かメリットがあるのか。

事務局 この結果は、全国の学力・学習状況調査の調査結果で、塾や家庭教師を含めた学習時間もいわゆる学習と認めた時間というのが文科省の考え方ということだと考えている。

委員長 塾にもいわゆる進学塾と補習塾と、事業経営者理念型のような大まかに3種類ある。例えば補習の塾であれば、確実に学校の宿題をやっているわけで、その時間は入れないとどうかと思う。進学塾のほうはむしろ先取りして進んでいくので、結局学校の内容のほうを含めているわけであるが、結局それが学力、いわゆる受験学力ベースに影響してくるので、そういう意味で含めてということになる。

委員 今、先生方は多忙と言われており、実際そうだとお見受けしている。昔の先生方はもっとのびのびしていた気もするし、今よりも圧倒的に授業に関わる時間があつたのではないかと思っている。そういう意味では、事務作業なり、いろんなことを減らす努力を市の教育委員会としてとか、県に対してだとか、どのような取組をしているのか、県も含めてどのくらい減らそうという具体的な数値目標をお持ちなのか。それが無い限り、労力を確保するための時間をつくれないと思うし、そのことに対しても市民へアピールしていく必要があると思う。

委員長 県のほうは学校に発出する文書を60%減らしたとか、そういったような実績は出している。数値目標は最初から立ててはいないので、実績ベースで出している。

委員 数値目標を持っていただきたい。このような会議で言うことが大切だと思う。

事務局 まさに学校の現場で先生が今どういう状況なのか皆さんからご心配をいただいていることはありがたいと思っている。

 学校の事務としては、国からの伝達がほとんどであり、これをこなすことは大変な作業である。この事務的な業務を、減らしたいということは我々も思っているが、国から県を通して市に来たものを我々が提出しないというわけにはいかないのが現状である。なるべく減らすことは県も頑張っていると思う。我々もその中で最低限のものは最低出して、必要なものの中から連携しているところであり、現実問題半減しますという目標は立てられていないというのが現状である。そういった中でどれだけの独自色が出していけるか、まさに皆様からのここで声を出していただきたいと思うし、我々も全国に出していく。

(3) その他

① 次回会議の開催日・内容について

日程調整表の提出を依頼。後日、次回日程をお知らせする。

② その他

なし

(4) 閉 会